目白大学　心理学研究
第19号　2023年　1－14

原著

性暴力被害後の相談行動を妨げる要因の検討
―被害に直面した際の被害者の反応に着目して

目白大学心理学部　齋藤　　梓

【要　約】
本研究は，性暴力被害後の相談行動を妨げる要因について，被害をうけた人の被害時の状態に着目して検討することを目的とし，NHKが実施した性暴力被害に関するアンケート結果の二次分析を行った。NHKアンケートの全体は38,383件の回答があり，そのうち，相談の有無について回答があり，従属変数と目的変数への回答が揃っている33,883件の回答を対象とした。また，11,670件の「誰にも話さなかった理由」に関する自由記述について分析した。ロジスティック回帰分析の結果，年齢が低い，体が動く状態だが抵抗をしていない，相手に合わせる言動を取っている，加害者と関係が近いなどの場合に，相談行動が阻害されることがわかった。自由記述の分析では，頻出語による回答のイメージ図を作成し，頻出語が用いられた記述を検討した。その結果，被害の認識の薄さや，相手に従う行動を取ったことで自分が悪かったと思う気持ちなどが相談行動を阻害していることが推測された。また，ジェンダー規範を背景としてレイプ神話，そして二次的被害が起きていた。性暴力に関する社会の認識を深め，被害にあった人が被害認識を持ちやすくすること，また，抵抗できない状態には，体が動かないということだけではなく，様々な状態があるのだということを，社会に積極的に伝えていき，性暴力被害に直面した時の人の行動について適切な理解を促すことが必要だと考えられる。

キーワード：性暴力被害，援助要請行動，自責感

問題

内閣府に委託されリベルタス・コンサルティング（2022）が16歳から24歳の人々を対象に行った調査では，性交を伴う性暴力被害の遭遇率は4.1％，身体接触を伴う性暴力被害は12.4％，視覚による性暴力被害は7.4％，言葉による性暴力被害は17.8％，情報ツールを用いた性暴力被害は9.7％であり，全体で26.4％の回答者が何らかの性暴力被害に遭遇したことがあるという結果が得られた。その他にも，内閣府男女共同参画局（2021）の調査では，成人女性の6.9％，成人男性の1.0％が無理やりの性交等の被害に遭遇したことがあると回答しており，社会の中で一定の割合で被害が発生していることがうかがえる。レイプや強制わいせつといった被害の場合，心的外傷後ストレス障害（Posttraumatic stress disorder，以下PTSDとする）の発症率が高いことも分かっており（Kessler, Bromet, Hughes, & Nelson，1995），性暴力被害に遭遇した人への支援の充実は，社会の喫緊の課題である。

一方，性暴力被害後に誰かに相談をする，援助要請行動をとる被害者は多くない。先述したリベルタス・コンサルティング（2022）の調査では，被害を誰かに相談したケースは半数に満たず，内閣府男女共同参画局（2021）の調査においても，無理やりの性交等の被害について，被害を誰かに打ち明けた人は男性が29.4％，女性が37.6％，警察に相談した人は，男性が0％，女性が6.4％であった。警察に相談に行く人は少なく，身近な人に相談することさえ，当たり前とは言い難い。性暴力被害者への支援を充実

させると同時に，援助要請行動を妨げる要因を検討し，援助要請をしやすい社会を作ることが必要だと考えられる。

性暴力被害後の援助要請行動に関連する要因として，国外の研究では，デモグラフィック要因として人種や経済状況，物質使用の有無などが上げられてきた（Millar, Stermac, & Addison，2002；Ullman，2007）。また事件に関連した要因として，加害者が見知らぬ人で，武器が使用されるなど暴力性が高い出来事である場合，援助を求める傾向が見られる（Millar et al.，2002；Ullman，2007；Amstadtr, McCauley, Ruggiero, Resnick, & Kilpatrick, 2008）。そしてPTSDが強く事件を話すことへの回避反応が生じている場合や，自責や恥を強く感じている場合，援助要請行動が妨げられる可能性があると指摘されている（Filpas & Ullman，2001；Patterson，2009）。また，男性を対象とした調査では，弱い男性だと思われる不安や同性愛者のレッテルを貼られる懸念が援助要請を妨げることが述べられている（Sable, Danis, Mauzy, & Gallagher，2006）。国内では，岡本・齋藤・大竹（2020）が，警察への届け出を巡る性暴力被害当事者の語りを質的に分析した。倫理観や使命感から，あるいは自分の窮状を伝えてサポートを得るために，警察に届け出る被害当事者がいる一方，自分に非があったと思う自責感や警察の信頼できなさなどから，警察への届け出を行わない被害当事者がいることを明らかにした。

性暴力被害後の援助要請行動に関する先行研究をまとめたZinzow, Littleton, Muscari & Sall（2022）は，個人レベルではマイノリティ化されたグループであること，性暴力被害の被害認識のなさ，被害に関する自己否定感が，マイクロシステムレベルでは，二次的被害や加害者からの報復への恐怖が，メソシステムおよびエキソシステムレベルでは，リソースへのアクセスしやすさの欠如や，法律，性別役割，家族の名誉を維持する文化的規範などが，援助要請行動を妨げていると述べた。淺野（2011）は，国外の研究をレビューし，レイプに対するステレオタイプ化された誤った思い込みであるレイプ神話を社会や個人が容認することで，被害者の自尊心が低下し，被害後の援助要請行動が抑制されると述べている。

こうした先行研究からは，デモグラフィック要因の他に，加害者との関係や事件の暴力性といった出来事自体の要因や，被害後のPTSD，自己否定感や自責感の有無が援助要請行動に関わっていることがわかる。また，レイプ神話やジェンダー規範，文化的規範といった社会的要因も，援助要請行動を抑制する要因として働いていることが推察される。

近年，被害時に身体が動かない状態になる強直性不動反応（Tonic immobility）が被害後の自責感やPTSD症状と関係していると指摘されている（Möller, Söndergaard, & Helström, 2017）。これまで，援助要請行動に影響する被害時の要因については，加害者との関係や事件の内容と言った観点が問題になってきた。しかし，自責感が援助要請行動を抑制する可能性があるならば，自責感を強める強直性不動反応のように，被害に直面したときの被害者の反応を考慮することも必要だと考えられる。そして，そうした反応が援助要請行動に影響するのであれば，さらに，なぜ影響するかを検討することも重要であろう。

被害に直面したときの被害者の反応について，これまで，Freeze反応（凍結反応），Fight-Flight反応（闘争－逃走反応），およびその後に発生する強直性不動反応の存在が述べられてきた（Marx, Forsyth, Gallup, Fusé, & Lexington, 2008）。現在，加えて，加害者を刺激しないように従順に接するFawn反応（迎合反応），加害者に友好的に振る舞い，さらなる暴力を防ごうとするFriend反応（友好反応）の存在が指摘されている（齋藤・岡本，2022）。

淺野（2011）が援助要請行動との関連を上げたレイプ神話には，「被害は抵抗すれば防ぐことができるはずだ」といった被害者非難の内容が含まれており，被害のときに身体が動かない状態が生じた場合や，迎合反応や友好反応が生じた場合，抵抗しなかったことで被害者が自分を責める気持ちが一層強まり，相談しにくくなることが推測される。

また，援助要請行動を妨げるその他の要因として，Zinzow et al.,（2022）は二次的被害を上

げている。性暴力被害では，レイプ神話やジェンダー規範といった社会的要因を背景とし，被害を相談したときに，「被害者非難」「被害軽視」「被害を疑う」が生じる。こうした，周囲の対応によって引き起こされる被害者の精神的苦痛を二次的被害と呼ぶ（齋藤・岡本，2022）。被害をうけた人が援助を求めたとしても，二次的被害やその背景にあるレイプ神話，ジェンダー規範等の社会的要因が存在した場合，被害者は適切なサポートにはつながらない可能性がある。

本研究では，性暴力被害後の援助要請行動に対して，加害者との関係や事件の暴力性の他に，被害者の状態や反応が影響するか否かを検討する。被害者の凍結反応や強直性不動反応のような体が動かない反応，迎合反応，友好反応は，援助要請行動を行わないことを予測すると推測される。また，被害を話さなかった理由の検討を合わせて行うことで，被害時の被害者の状態や反応が，どのように援助要請行動を妨げているのか，そこに性暴力に対する社会の誤った認識がかかわっているのかを明らかにする。さらに，相談後の二次的被害の現状を把握し，被害者がより相談しやすい，二次的被害が発生しにくい社会の実現への一助とする。

本研究では，上記目的のため，日本放送協会（NHK）が実施した「“性暴力”実態調査ウェブアンケート（以下，性暴力アンケートとする）」の結果を二次的に分析する。性暴力被害者を対象とした調査のように侵襲性が高く，通常以上に調査を進めることが困難な調査において，2次データを活用することは有用性が高い（岩田，2021）。NHKが実施したこの調査は，ウェブ上で行われており，対象者の代表性に偏りがあるなど課題がある一方，38,383件の回答が集まっており，性暴力被害を対象とした調査では規模の大きいデータである。このデータを再分析することの意義は高いと考えられる。

方法

1．分析対象データ

本研究では，NHKが実施した性暴力アンケートのデータを分析対象とする（NHK，2022）。性暴力アンケートはウェブ上で実施され，主にSNSやメディアを通じて広報がなされた。すべての質問に無回答だったもの，性加害者と名乗るものなどを除き，アンケートの回答総数は，38,383件であった。このうち，被害当事者本人が回答した37,531件（平均年齢32.81歳，SD = 8.97）を分析の対象とした。なお，回答者への負担を軽減するため，すべての項目において「無回答」が可能となっており，欠損値が生じるため，分析対象データ数は項目および分析内容ごとに異なっている。

2．アンケート項目内容

アンケートの最初に，人生で遭遇した性暴力被害のうち，「最も衝撃を受けた1つの出来事」について回答するようにという教示が行われた。その上で，回答者の年齢や性別のほか，被害内容，加害者の性別，人数，最初に被害に遭った年齢，継続した場合は最後に被害に遭った年齢，加害者との関係，抵抗できたか否か，身体が動かない状態を含む被害に遭遇したときの気持ちや身体の状態，暴行脅迫の有無を含む加害者の言動，迎合反応や友好反応の有無，被害の認識，相談行動の有無，相談相手，警察への相談の有無，相談時の周囲の人の反応，被害後の就学・就労・経済状況，被害後のトラウマ反応，希死念慮など多岐にわたる項目が質問された。なお，質問項目は，今回の調査に関わるNHK内のプロジェクトチームが作成した後に，大学教員や弁護士，支援者，被害当事者団体等，10名の有識者及び団体が，質問の内容や形式，倫理的配慮について検討を行った上で決定された。

本研究では，得られた回答のうち，Table 1に記した内容のみを用いて二次的に分析した。なお，「被害のカテゴリ」「加害者との関係」「被害時に暴行脅迫があったかどうか」については，性被害アンケート実施時はより具体的に尋ねていたが，項目の内容が多いために回答がまとまっている。この作業を含め，NHKが事前に，回答内容の分類や項目についてデータクリーニングを実施した。

3．調査実施時期

NHKによる「“性暴力”実態調査ウェブアンケート」は2022年3月11日から4月30日に実施された。

Table 1
本研究の分析に使用したデータ項目内容および回答の形式

分析に使用したデータ項目内容（回答件数）	回答の形式あるいは項目（それぞれの回答件数）
回答時の性別(36831)	1=女性（34397） 2＝男性（385） 3＝Xジェンダー（中性，両性，無性，不定性）（2049） 4＝その他（338） 5＝答えたくない（332）
回答時の年齢（36842）	数字を記述
被害のカテゴリ（37509）	1=口や肛門，膣への性器や異物等の挿入を伴う被害（7953） 2＝衣服の上あるいは下から触られる等の身体接触を伴う被害（26049） 3＝性的からかい、裸等の同意のない撮影、下着窃盗、露出等の接触のない被害（3507）
被害年齢／最初の被害年齢（37030）	数字を記述（継続した被害の場合は被害に遭った最初の年齢を記述）
加害者との関係（36438）	1＝（元）パートナー・恋人・配偶者（2496） 2＝それ以外の家族（5026） 3＝それ以外の知り合い（11597） 4＝全く知らない人（17319）
被害を人に話して（相談して）いない（37492）	0＝話した（25669） 1＝話していない（11823）
被害時に体が動かなかった・声がでなかった（37427）	0=いいえ（22791） 1＝はい（14636）
被害時に体を使って抵抗していない（37389）	0＝いいえ（23645） 1＝はい（13744）
被害時の暴力や脅迫の程度（36828）	1=暴力や脅迫があった（1910） 2＝怒鳴る，秘密をばらすと思わせるなどの威力や威迫があった（3393） 3＝だます、洗脳するなどその他の働きかけがあった（31525）
被害時に加害者に合わせるような言動をした（36563）	0＝いいえ（27076） 1＝はい（9487）
被害時に感謝や好意をほのめかすなど加害者を喜ばせるような言動をした（36563）	0＝いいえ（33309） 1＝はい（3254）
PTSDの診断が付く可能性があるかどうか（34520）	0＝IES-Rの合計で24点以下（15825） 1＝IES-Rの合計が25点以上（18695）
被害を誰にも言わなかった理由（11945）	自由記述
迎合反応あるいは友好反応を示した理由（28331）	4項目から複数選択可能（表4に記述）
相談後の二次被害的対応（29841）	9項目から複数選択（表5に記述）
相談後の二次被害的対応の具体例（8840）	自由記述

4．倫理的配慮

本研究はNHKの取得したデータの二次分析を行う研究であり，研究者自身は個人を同定するような一次資料を扱っておらず，研究者自身が個人に直接不利益をもたらすことはないと考えられ，倫理審査委員会には諮っていない。NHKがアンケートを実施する際には，弁護士を含む有識者がアンケートに倫理上の問題がないかを確認して実施している。また，アンケートのはじめに，アンケートによる精神的負担に関する説明，回答はいつでも中止できること，および必要な場合の相談窓口の情報を明記し，同意が得られた場合のみ回答を依頼した。データの二次分析にあたっては，NHKとのあいだに，NHKが任意で収集した回答者の氏名等は一切提供されない等，データの取り扱いに関する覚え書きを交わした。

結果

1．援助要請行動の抑制を予測する要因の検討

Table 1に，それぞれの項目の回答件数を示した。回答全体の回答時の年齢の平均は32.81歳，標準偏差は8.97であった。援助要請行動について，性暴力被害では，被害者はどのような助けが必要か自分で把握していない場合が多いため，まず被害について誰かに話すことが重要であると考えられ，本調査では「被害を誰かに話して（相談して）いない」という尋ね方をしている。その項目への回答を予測する要因を検討するため，「被害を誰かに話して（相談して）いない」を目的変数，「回答時の性別」「被害のカテゴリ」「被害年齢／最初の被害年齢」「加害者との関係」「被害時に体が動かなかった・声がでなかった」「被害時に体を使って抵抗していない」「被害時の暴力や脅迫の程度」「被害時に加害者に合わせるような言動をした」「被害時に感謝や好意をほのめかすなど加害者を喜ばせるような言動をした」「PTSDの診断がつく可能性があるかどうか」を説明変数としてロジスティック回帰分析（強制投入法）を実施した。分析は，すべての項目への回答が揃っている33,883件に対して実施された。なお，「被害年齢／最初の被害年齢」は連続変数であり，「被害のカテゴリ」「加害者との関係」「被害時の暴力は脅迫の程度」は順序尺度とみなした。その他はダミー変数とし，「回答時の性別」は，解釈の問題から「その他」と「答えたくない」の回答を除き，「女性」「男性」「Xジェンダー」の3カテゴリを使用することとし，2つのダミー変数を用いた。分析にはSPSSver26を使用した。

ロジスティック回帰分析実施前に説明変数間の相関分析を行った。その結果，0.35を超える相関がみられる変数はなく，すべてを説明変数として投入することとした。結果，的中率は68.5％であり，HosmerとLemeshowの検定において有意確率<.001であったが，援助要請行動に影響する要因は多岐にわたるため，今回の説明変数のみでモデルが成立するとは考えにくく，それぞれの項目が影響しているかを確認することが重要であると考えた。

結果をTable 2にまとめた。投入された説明変数はすべて有意な変数として選択された。偏回帰係数が正であったものは「被害時に加害者に合わせるような言動をした」（オッズ比：1.18，95％信頼区間：1.11-1.25），「被害時に体を使って抵抗していない」（オッズ比：1.15，95％信頼区間：1.10-1.21），「PTSDの診断がつく可能性がある（オッズ比：1.09，95％信頼区

Table 2
「被害を誰かに話して（相談して）いない」を予測する回帰式の係数（N=30830）

	偏回帰係数	標準誤差	有意確率	オッズ比	95％信頼区間 下限	95％信頼区間 上限
回答時の性別（女性）	-.48	.12	<.00	.62	.49	.78
回答時の性別（Xジェンダー）	-.62	.13	<.00	.54	.42	.69
被害時に体が動かなかった・声がでなかった	-.10	.03	<.00	.83	.79	.88
被害時に加害者に合わせるような言動をした	.17	.03	<.00	1.18	1.11	1.25
被害時に感謝や好意をほのめかすなど加害を喜ばせるような言動をした	-.11	.05	.03	.90	.82	.99
被害のカテゴリ	-.12	.03	<.00	.89	.84	.93
被害年齢／最初の被害年齢	-.03	.00	<.00	.97	.97	.98
加害者との関係が遠い	-.19	.02	<.00	.83	.80	.85
被害時に体を使って抵抗していない	.14	.03	<.00	1.15	1.10	1.21
PTSDの診断がつく可能性がある	.09	.03	<.00	1.09	1.04	1.14
被害時に暴力や脅迫が弱い	.27	.03	<.00	1.31	1.24	1.38

間：1.04-1.14），「被害時に暴力や脅迫が弱い」（オッズ比：1.31，95％信頼区間：1.24-1.38）であり，負であったものは「回答時の性別（女性）」（オッズ比：.62，95％信頼区間：.49-.78）「回答時の性別（Xジェンダー）」（オッズ比：.54，95％信頼区間：.42-.69）「被害時に体が動かなかった・声がでなかった」（オッズ比：.83，95％信頼区間：.79-.88），「被害時に感謝や好意をほのめかすなど加害者を喜ばせるような言動をした」（オッズ比：.90，95％信頼区間：.82-.99），「被害のカテゴリ」（オッズ比：.89，95％信頼区間：.84-.93），「被害年齢／最初の被害年齢」（オッズ比：.97，95％信頼区間：.97-.98），「加害者との関係が遠い」（オッズ比：.83，95％信頼区間：.80-.85）であった。

２．援助要請行動を行わなかった理由の視覚的把握

「被害を誰にも言わなかった理由」を尋ねた自由記述について，11,945件（女性10,837件，男性165件，Xジェンダー等668件，その他の回答275件）の記述のうち，女性，男性，Xジェンダー等の３つのグループの視覚的把握を行った。分析には，質的分析ソフトNVivoを用いた。

類似語を含む頻出語を検出し，回答件数と出現頻度を考慮した上で女性は頻出順に200単語を，男性は頻出順に50単語を，Xジェンダー等は頻出順に80単語を選択し，その出現頻度と関係性のイメージ図について，Nvivoを用いて作成した。また，それぞれのテキストへの関連度の重み付け上位５単語が用いられている記述の例をTable ３にまとめた。今回の分析データは，特に女性のデータが10,837件と数が多く，大きな傾向を把握するために，視覚化は有用な手段であると考えられる。また，女性，男性，Xジェンダーについて傾向の比較にも有用だと考えられる。

頻出語の出現頻度と関係性のイメージ図をFigure １からFigure ３に示した。イメージ図は，文字が大きく中心に位置するほど出現頻度が高く，近くにあるものが関連して出現する事が多いことを示す。

Table ３
関連度の高い言葉に含まれる自由記述例

性別カテゴリ	関連度の高い言葉	含まれる自由記述例
女性	知る	・受けた性暴力はいわゆる痴漢だったのですが、被害を受けた当時は痴漢を性暴力であると理解、認識していなかった事。 誰に相談すればよいのか、加害者が逃げた後でも訴えてよいのか分からなかったため。 ・知識が無かったため、それが何を意味するのかが分からなかった。高校生になってから何をされたか理解した。 ・当時、何が起きたかは分からなかったが酷く恥ずかしいことをされた、辱められた感覚があって話せなかった。 恥ずかしいことをされたのは、警戒していなかった自分が悪いのだと思った。 起きたことを話したら、あなたが悪いと責められる気がした。
	相談	・同級生からいじめを受けていたことがあって、その時親も教師も笑って聞き流すだけだったので。恥ずかしくて大事にしたくない気持ちと相手の顔とか名前とか覚えていなかったこともあって警察に相談することもなかったです。 ・「痴漢にあった」というのは人によっては「自慢だ」と捉えられる事があるので。 恋人からの同意のない行為については相手が相手なので、他人に相談しづらく、また人によっては「のろけ」と判断されてしまうと思ったので。
	恥ずかしい	・性的な被害を受けていることを話すのが怖い、恥ずかしいと思うから ・幼心に恥ずかしいことだと認識した。・ありふれたことであり、誰かに話すほどのことではないと思った。
	家族	・「わたしが悪かった」や「こうすればよかった」など、それを言われたら辛くなるようなことを言われるかもしれないと思って、関係性は良好な家族や友人にも話せなかった。 ・加害者とは家族間で付き合いがあった為、家族に伝わると迷惑がかかると思った。
	相手	・上司に関しては既婚者だったため、会社での相手の立場を考えたから。会社を辞めたくなかったから。

		・相手に言いくるめられて従ってしまった自分が情けなくて、人に言えなかった
男性	知る	・性被害だと認識したのは， 割とつい最近であるということ。 ・パートナーがいるため、身内を含めて他人知られると今後どうなるかわからないから。 ・男子中学生である自分が同性である男性からそういうった行為をされたことを周囲に知られることは恥ずべきことだと思ったから
	恥ずかしい	・されたことを誰かに話すのが嫌だった。 また、判断を誤ってついて行ってしまったことを恥ずかしく思ったから。 ・自分が悪いことをした結果、恥ずかしい思いをしたと思ったから。
	相談	・クラスの中での出来事だった為話すまでも無く周知に起きていた。また、「相談」する事で傷付いているという印象を与えたくも無かった。 ・誰も信頼できなかったし、どのように相談すれば良いかもわからなかった。
	男性	・女性から男性への性暴力なんて信じられない、馬鹿にされると思った ・成人男性が痴漢被害にあったと話して、回りに心配かけたくなかった
	受ける	・男性なのに、男性に性的暴力を受けていると打ち明けにくかった 自分が穢れていると知られたくなかった ・被害を受けていることを他人に話した時にどんな反応を受けるのか考えると躊躇ってしまう(男のくせに、耐えればよい等)
Xジェンダー等	話す	・「恥ずかしい」という気持ちがあり、それを誰かに話す気持ちにはなれませんでした。 ・自分が抵抗の意志を見せず、相手の要求に簡単に応えていたので、誰かに相談しても自業自得だと言われるかと思った。 （中略）話すのが恥ずかしいとも思っていたと思う。 ・これが性的被害なのかわからなかった。気持ち悪くて話したくなかった。話すと認めてしまうと思った。
	相談	・相談をして「何で抵抗しなかった」「気にしすぎ」等の言葉を言われたら嫌だった ・あまりにも突然すぎ、多すぎ、そして証拠が残ってないものばかりで、誰に相談しても無駄だと思った。今も思ってる。
	認識	・"被害"だと思わなかった。怒っていいことだと認識出来ていなかった。 ・その頃から性自認が男性寄り(少なくとも女性ではないという意識)だったので、女性が受けるような被害を受けたという衝撃が強く、被害を認めたら自分が女性であると認めることになる気がして、誰にも話していない。
	加害	・加害者が業界では地位のある人間だったので言える場所がなかった ・当時はSNSもなかったので匿名で告発もできなかった ・加害者が親族で年下のため、抵抗しなかった自分が責められたりという二次加害される不安があるため。
	相手	・自分が相手に性加害を加えるように仕向けたと思われるのが嫌だった。 ・相手の方が立場が上だったので、周囲から勘違いじゃないか、考えすぎ、など言われるのが怖かった。

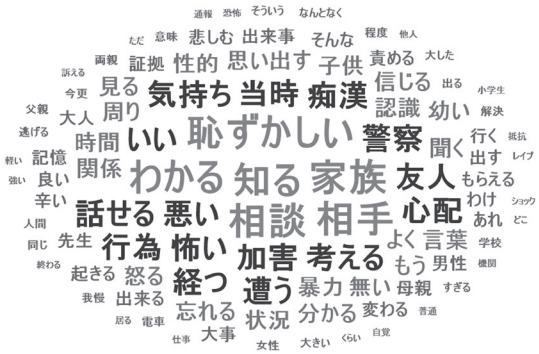

Figure 1　女性の「被害を誰にも言わなかった理由」
自由記述頻出語のイメージ図

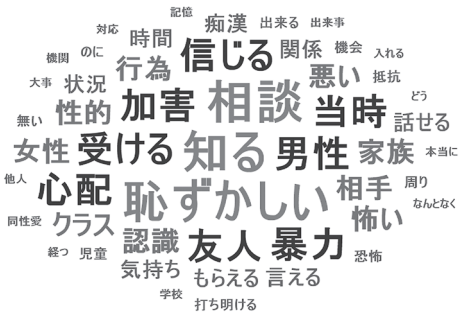

Figure 2　男性の「被害を誰にも言わなかった理由」
自由記述頻出語のイメージ図

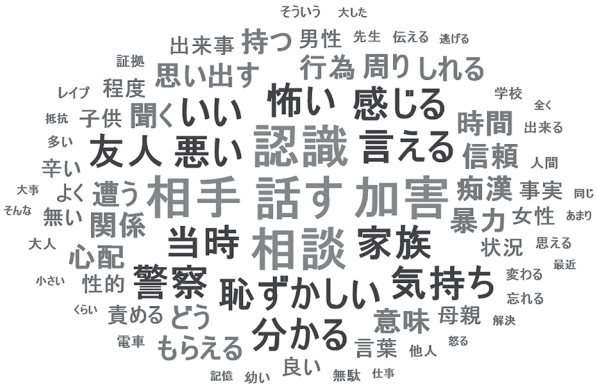

Figure 3　Xジェンダーの「被害を誰にも言わなかった理由」
自由記述頻出語のイメージ図

3．加害者に迎合するような言動を取った理由および相談後の二次的被害のまとめ

加害者に迎合をするような言動を取った理由への回答をTable 4にまとめた。相談後の二次的被害に関する回答およびその具体例をTable 5にまとめた。回答はそれぞれ,「加害者に迎合をするような言動は取っていない」「被害を誰にも話していない」者も回答ができる形になっていたため，回答件数にそれらが含まれている。

Table 4
迎合反応あるいは友好反応を示した理由

項目	回答件数(=28331)
そうしないとひどい目に遭うと思った	9165
相手に嫌われたくないと思った	2982
何故だか分からない	11247
その他	9040

Table 5
二次的被害項目回答件数および具体例

二次的被害項目	回答件数（N＝29481）	具体例（自由記述より抜粋）
被害に関して「もう忘れたほうがいい」など”なかったこと”にすることをすすめるようなことを言われた	5592	・夫に気合で忘れろと言われた ・忘れて頑張ろ！と言われた
「たいしたことはない」「よくあることだ」など矮小化するようなことを言われた	8855	・母や祖母からは、「私も過去に友人や痴漢にあったことがある。でも、そういった男はいる。仕方がない事。我慢するしかないのよ。」と諭す様に言われ被害者自身の認知の歪みを感じた。 ・本当の被害内容を知らない友人から『私みたいに電車通勤をしてると毎日のように痴漢に遭うのよ。』と言われた。実際には電車内の痴漢ではないのだが言いたくないので2次被害に晒されて続けた。
「あなたが魅力的だったからだよ」など肯定的に捉えるようなことを言われた	5187	・「女の人に触られたなんてラッキーじゃん」「興奮した？大きくなったの？」「犯人もどうせならもっとイケメンを選べばいいのにね」などと女性たちにからかわれた。 ・彼氏がいないと悩んでいる知人には「でもそれって求められてたってことじゃない？」と半ば羨ましげに言われました。
「ちゃんと断らなかったんじゃない？」「抵抗しなかったからだよ」など責めるようなことを言われた	4439	・「お酒を呑んで酔ってたお前が悪い」「自業自得」「馬鹿だろ」と言われた ・被害直後家族に話したところ、なぜすぐ逃げなかったんだ、すぐ大人に言わなかったんだと責められ、風呂場へ連れて行かれ下半身をごしごし洗われた。
「男ってそういうもの」「酔ってたならしかたない」など加害者を擁護するようなことを言われた	5244	・彼はずっとあなたを好きだったんだよ、思わせぶりな態度をしてたんじゃないの、人の好意をセクハラみたいに悪く言うなんてあなたは最低だね、など。 ・友人（男）は「加害者は良い人だ」と擁護したり、些細な事扱いされた。
被害に関して傷つくことを直接言われた	2848	・良かったじゃん！　とわざと傷付けるような事を言われ嘲笑された ・恋人から興味津々でその時の話をするよう言われた
SNSなどネット上の書き込みに傷ついた	2063	・SNSに痴漢がいたと書き込んだところ、「警察に通報しなかったの？通報しなければ他の人がまた被害に遭うかもしれないのに」などと非難をされた。もっともではあるが、親に知られるのが嫌だったという私の気持ちが踏みにじられたと感じた。 ・SNS等で私ではない被害者の人格を考慮していない書き込みを見るたびに怒りが湧いた。
マスコミの報道に傷ついた	1001	・テレビ等で被害者にも非があると言うコメントを聞くことがよくある。色々な意見があるのは分かるが、性暴力に対する理解も知識も被害経験もない人間のコメントがなぜ価値あるものとして尊重されているのか。 ・その痴漢に遭った数日後にニュースで同じような高齢者の痴漢が「相手が喜んでいると思ってやってる」と話し、そのまま誰にも咎められずに取材を受けているのを見てショックを受けた。
被害後の周囲の反応で傷ついたこと・困ったことはない	9487	・「魅力的だったからだ」という趣旨の事は言われたが、傷付いてはいない。どうにか慰めようと手当り次第に言葉を投げた結果そのような間違った対応が飛び出しただけで、本当に自分に責があるかのような認識をしている訳では無いな、と相手の反応から読み取れた為。 ・被害にあった事がある人ばかりだったので大丈夫だった。

考察

1．援助要請行動を阻害する要因について

被害に直面した際の，身体が動かない状態，迎合反応，友好反応は，援助要請行動の抑制を予測すると推測し分析を行った。ロジスティック回帰分析の結果，まず，先行研究でも述べられている加害者との関係および事件の暴力性が関係していることが分かった。具体的には，加害者との関係が身近であるほど，そして被害時の暴力や脅迫の程度が弱いほど，被害を誰かに話していない可能性が高まるという結果が得られた。Millar et al.,（2002）およびUllman（2007）の研究等先行研究では，加害者が見知らぬ人で，暴力性が高い出来事である場合に援助を求める傾向が見られているため，この結果は先行研究と一致する。Table 3における「加害者とは家族間で付き合いがあった為，家族に伝わると迷惑がかかると思った」「相手の方が立場が上だったので，周囲から勘違いじゃないか，考えすぎ，など言われるのが怖かった」といった自由記述例から，加害者が身近な者の場合には，被害を誰かに相談したときに，影響が及ぶ範囲が広い，自分に不利益が生じる可能性があるといったことも，相談要請行動を抑制すると推測される。また，被害時の暴力や脅迫の程度が弱い場合，相談しても周りに被害だと思われないことを恐れる可能性が考えられる。一方で，自由記述例では「相手に言いくるめられて従ってしまった自分が情けなくて，人に言えなかった」と言った記載も見られた。性暴力は暴力であり，当然加害をした側に責任があるが，暴力や脅迫の程度が弱いほど，性暴力被害にあった自分に対する自責感が募り，相談行動が抑制される可能性も考えられる。

次に，被害のカテゴリおよびPTSDについては，挿入を伴う被害など被害の客観的深刻さが増すほど，またPTSDの診断がつく状態である場合に，被害を誰かに話していない可能性が高まることが分かった。この点についても，PTSDが強い場合に事件を話すことを回避することが先行研究で指摘されている（Filpas & Ullman.，2001；Patterson，2009）。

本研究の目的である被害者の状態や反応については，体を使って抵抗をしていないこと，迎合反応があることは，援助要請行動の抑制を予測することがわかった。仮説は一部支持されたが，体が動かない場合や，友好反応が見られる場合に援助要請行動が抑制されるという仮説は支持されなかった。Table 3の自由記述例では，先述した「相手に言いくるめられて従ってしまった」という自分を責める記述に加え，「判断を誤ってついて行ってしまったことを恥ずかしく思ったから」「自分が抵抗の意志を見せず，相手の要求に簡単に応えていたので，誰かに相談しても自業自得だと言われるかと思った」と自分を責める記述が見られる。いずれも，体は動く状態だが，相手に従わされた状態である。性暴力被害時によくみられる反応ではあるが，動けたはずなのに，自分が自発的に従ってしまった感覚により自責感が強まり，その後の援助要請行動が抑制されると推測される。

援助要請行動が抑制される背景について，視覚的把握のイメージ図からも検討を行う。女性が，なぜ誰にも話さなかったのかの理由について記した自由記述結果を視覚化した内容からは，被害について「恥ずかしい」と思っていること，「知る（それが被害であると知る）」という被害認識の問題，「家族」「相手」など加害者の属性，「悪い」「行為」など自責感につながる言葉などが見られる。また，Xジェンダーも女性と同様の傾向があり，「認識」という被害認識，「家族」「加害」「相手」などの加害者に関すること，「恥ずかしい」「悪い」などの被害にまつわる自責感や恥ずかしさが見られる。内閣府男女共同参画局（2021）の調査においても，被害を相談しない理由として「恥ずかしくてだれにも言えなかったから」は最も回答が多く，性暴力にあったことを恥じる気持ちは，援助要請行動の大きな阻害要因だと考えられる。また，Zinzow et al.,（2022）は被害認識の問題を上げており，自分の身に起きたことを「性暴力だ」「相談して良いことだ」と認識することができないことも，阻害要因だろう。

迎合反応は，自分の身を守るための反応であるにも関わらず，自分が相手に従ったと被害者が思いやすく，自分が被害に遭っていると認識しづらくなると想定される。一方で，友好反応が相談行動の抑制に繋がってない理由として，

恐怖を感じたために自分を守ろうと能動的に行動したという認識があった可能性も考えられる。しかし，他の要因と比べると有意確率も高く，交絡要因の影響も考えられ，慎重な検討が必要である。迎合反応あるいは友好反応を示した理由において，「何故だか分からない」と回答した者も多く，何故だがわからず相手に合わせて従った場合，より一層，自分を責めるだろう。そうして自分が悪いと思っていたならば，それは暴力だとは思えないかも知れない。被害だと気づいていないならば，援助を求めることはそもそも想定されない可能性がある。

こうした状況を変えるためには，性暴力に関する社会の認識を深め，被害にあった人が被害認識を持ちやすくすること，また，抵抗できない状態にも，体が動かないということだけではなく，様々な状態があるのだということを社会に積極的に伝えていき，性暴力被害に直面した時の人の行動について適切な理解を促すことが必要だと考えられる。

２．二次的被害の現状について

二次的被害の現状について，項目への回答件数及び具体例をまとめた。「被害に関して傷つくことを直接言われた」「SNSなどネット上の書き込みに傷ついた」「マスコミ報道に傷ついた」という回答がやや少ないが，そのほかの，「被害を忘れるように勧める」という被害の影響の軽視，「たいしたことではない」という矮小化，「被害を肯定的に捉える」という矮小化，「被害者を責める」という被害者非難，「加害者を擁護する」という加害者擁護など，二次的被害の典型的な内容は，経験をしているという回答が一定程度見られた。一方，被害後の周囲の反応で傷ついたこと・困ったことはないという回答が多く見られた。傷ついたことや困ったことがないという回答は，本来は肯定的な回答であるが，この項目を回答した人の中には，「そもそも誰にも話していない」という回答も含まれる。また，具体例で書いたように，被害者側が相手の言葉を肯定的に受け止めた結果，傷つかずに済んだという，言動自体は否定的な内容である例，被害が多く発生しているために傷つく言動がなかったという，否定的な状況が推測される例など，必ずしも肯定的な内容だけとは言えない。調査の結果からは，二次的被害は様々な種類の被害が生じていることが分かった。どのような種類の二次的被害が見られるかを社会に伝え，性暴力がどのように起きるのか，どのような影響があるのかを知らせることは，二次的被害の起きない社会のための，大切な課題であると考えられる。

また，淺野（2011）は，被害者非難やレイプ神話が援助要請行動を抑制すると述べているが，被害者非難等の二次的被害が発生する背景には，性暴力に関する誤った認識であるレイプ神話があると考えられる。そしてレイプ神話の背景には，ジェンダー規範の存在がうかがえる。Table 5の「お酒を呑んで酔ってたお前が悪い」といった記載は，人前で酔う女性は性暴力被害に遭っても仕方ないというレイプ神話であるが，女性は貞淑であるべきだというジェンダー規範の存在が推測される。また，Figure 2では「男性」という言葉が見られ，Table 3では「女性から男性への性暴力なんて信じられない，馬鹿にされると思った」「男子中学生である自分が同性である男性からそういった行為をされたことを周囲に知られることは恥ずべきことだと思ったから」といった，女性は加害をしない，男性は性暴力被害に合わないというレイプ神話が見られる。さらに「男のくせに，耐えればよい」といった記載もあり，男性は力強い存在である，弱い男性は男性ではないと言ったジェンダー規範の存在が推測される。二次的被害を減少させていくためには，ジェンダー規範まで踏み込んだ理解を広めることも必要である。

あるいは，先述したXジェンダー等では「被害を認めたら自分が女性であると認めることになる気がして，誰にも話していない」いった記述が見られ，Xジェンダーを自認する者が女性として見られる苦痛もうかがえる。性暴力は性を問わず発生する暴力であり，セクシュアリティやジェンダーに関する理解が広まることもまた，安心して援助要請を行うことができる社会の構築には重要だと考えられる。

３．本研究の限界と今後の展望

本研究では，NHKが行った性被害アンケート

の二次分析を行った。性暴力被害に関するものなど侵襲性の高い調査において，二次分析は重要である。自由記述を見る限り，回答者の回答への熱意は高いが，一方で，データの代表性の問題など，データ自体の課題も存在する。特に，男性も一定数被害に遭っていることがわかっている一方，今回，男性の回答は少なかった。それは「性暴力」のアンケートであるとしていたため，被害認識の薄い人々が回答しなかったこと，また，男性は性暴力に合わないという誤った社会の認識や，男性の相談の障壁の高さを，まさに表している事が考えられる。今後，データ収集方法やアンケートの文言をさらに検討することが必要であろう。また，今回，自由記述部分は，主に頻出語の視覚化や回答内容の例示を行った。自由回答は，数字からは見えてこない性暴力被害の現実を読み取ることができ，今後，より詳細な分析を実施する必要があると考えられる。

研究自体の発展として，本研究の結果から，被害に直面した時の被害者の状態や反応と自責感とのつながりが，援助要請行動の阻害要因となる可能性が示唆された。被害に直面した時の被害者の状態や反応については，まだ実証的研究は少なく，自責感とどの程度のつながりがあるか，PTSDとの関係はどうか，どういった状況下でどのような反応が見られるかなど，今後明らかにし，性暴力被害の実際を社会に伝えていく必要がある。また，ジェンダー規範の影響についても，さらなる検討が必要だろう。日本は未だ性暴力被害の研究が多くはなく，今後，回答者への慎重な配慮が行われた上で，様々な視点から実施されることが望まれる。

謝辞

この研究は，「NHK“性暴力”実態調査ウェブアンケート（2022年３月11日～４月30日）性暴力被害に遭ったという人・その家族など38,383件の回答」により作成された。負担の大きい項目に回答くださった多くの性暴力被害当事者に心より感謝申し上げます。そしてデータクリーニング等，集まったデータを丁寧にまとめあげ，二次分析に使用させてくださいましたNHKの担当の方々にも，厚く御礼申し上げます。

引用文献

Amstadter AB, McCauley JL, Ruggiero KJ, Resnick HS, Kilpatrick DG. (2008). Service utilization and help seeking in a national sample of female rape victims. Psychiatry Service, 59(12), 1450-7.

淺野敬子(2011)．犯罪被害者の援助要請行動に関する研究の概観：性犯罪被害者における援助要請行動の要因，武蔵野大学大学院言語文化研究科・人間社会研究科研究紀要，1，61-66.

Filipas, H. H. and Ullman, S. E. (2001). Social reactions to sexual assault victims from various support sources. Violence & Victims, 16, 673-692.

岩田千亜妃(2021)．性暴力被害者のニーズを踏まえた相談支援のあり方についての検討―「性被害の実態調査アンケート」質的調査の２次分析を通じて―，社会福祉学，62，58-72.

株式会社リベルタス・コンサルティング（2022）．令和３年度若年層に対する性暴力の予防啓発相談事業　若年層の性暴力被害の実態に関するオンラインアンケート及びヒアリング結果，内閣府男女共同参画局．https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/r04_houkoku/01.pdf（参照 2022-9-23）

Kessler RC, Sonnega A, Bromet E, Hughes M, Nelson CB. (1995). Posttraumatic stress disorder in the National Comorbidity Survey. Arch Gen Psychiatry, 52(12), 1048-60.

Marx, B.P., Forsyth, J.P., Gallup, G.G., Fusé, T., Lexington, J.M., (2008). Tonic Immobility as an Evolved Predator Defense: Implications for Sexual Assault Survivors. Clinical Psychology Science and Practice, 15, 74-90.

Millar G, Stermac L, Addison M. (2002). Immediate and delayed treatment seeking among adult sexual assault victims. Women Health, 35(1), 53-64.

Möller, A., Söndergaard, H.P., Helström, L., (2017). Tonic immobility during sexual assault - a common reaction predicting post-traumatic stress disorder and severe depression. Acta Obstetricia et Gynecologica Scandinavica, 96, 932–938.

内閣府男女共同参画局(2021)．男女間における暴力に関する調査報告書 https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/r02/r02danjokan-1.pdf（参照 2022-9-23）

岡本かおり・齋藤梓・大竹裕子(2020). 性暴力被害の警察届出をめぐる被害当事者の思い―被害当事者へのインタビュー調査に基づく検討―, 清泉女学院大学人間学部研究紀要, 17, 25-49.

Patterson D, Greeson M, Campbell R. (2009). Understanding rape survivors' decisions not to seek help from formal social systems. Health Social Work, 34(2), 127-36.

Sable, M. R., Danis, F., Mauzy, D. L., & Gallagher, S. K. (2006). Barriers to reporting sexual assault for women and men: Perspectives of college students. Journal of American College Health, 55(3), 157-162.

齋藤梓・岡本かおり (2022). 性暴力被害の心理支援, 金剛出版.

「性暴力を考える」取材班(2022). 性暴力アンケート　38,383件の回答が寄せられました. NHKみんなでプラス, 2022年5月27日 https://www.nhk.or.jp/gendai/comment/0026/topic059.html (2022年9月23日閲覧)

Ullman SE. (2007). Mental Health Services Seeking in Sexual Assault Victims. Woman&Therapy, 30, 61-84

Zinzow HM., Littleton H.,Muscari E., & Sall K., (2022). Barriers to Formal Help-seeking following Sexual Violence: Review from within an Ecological Systems Framework. Victims & Offenders, 17, 893-918.

―2022年9.23.受稿, 2022年11.24.受理―

Examination of factors that inhibit help-seeking behavior after Sexual Violence

— Focusing on victims' reactions at the time of the victimization

Azusa Saito　Mejiro University, Faculty of Psychology

Mejiro Journal of Psychology, 2023 vol.19

【Abstract】

This study aimed to examine, quantitatively and qualitatively, the factors that inhibit sexual violence victims from seeking counseling, focusing on the factors at the time of the victimization, and using a secondary analysis of the results of a survey conducted by NHK. The quantitative analysis included 37,531 respondents and the qualitative analysis included 11,670 open-ended statements as part of their free responses. A logistic regression analysis revealed that counseling-seeking behavior was inhibited when the victim did not physically resist, at the mercy of the other party and in a close relationship with the perpetrator. From the analysis of the open-ended statements, it was inferred that the lack of recognition of the victimization and the feeling of being at fault for following the actions of the other person inhibited help-seeking behavior. In addition, rape myths and secondary victimization occurred against a background of gender norms.

keywords : sexual violence, help-seeking, sense of responsibility